読書推進運動

No.691

★「上野の森 親子ブックフェスタ」開催（2頁）
★「第64回 全出版人大会」開催（4頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

書店と図書館の関係　これまでとこれから

図書館と地元書店の共存が地域の読書を推進する

日本書店商業組合連合会 図書館委員会
委員長・高島書房 代表取締役社長
高島瑞雄（たかしまみずお）

図書館は、書店にとって経営上優良な取引先である。特に地方の中小書店にとっては、金額的にも内容的にも手放したくない、優良顧客だった。

いくつかの障壁が出てきた結果、「だった」のである。

最初の壁が、装備付き納品

第二の壁が、入札制度

第三の壁が、MARC

そして、追い打ちをかけたのが、小泉政権下で施行された指定管理者制度である。

最初の「装備付き納品」は、昭和50年代半ばに普及し始めた納品条件で、素納品（入荷した書籍をそのまま納品）ではなく、図書館が指定する様式で、フィルム加工、背ラベル貼付、基本カードや貸出カードの作製、台帳記帳等々の作業をして納品するサービス（対価を支払う図書館もある）であり、低粗利の書店としては負担が大きく、納品を断念する書店が出てきた。

フル装備の単価は、現在250円くらいと言われている。

第二の「入札制度」は官公庁としては当然の行使というが、低粗利の書店が、落札した際の減額分の仕入金額を負担する行為であり、さらに薄利となり、常軌を逸している。

第三のMARCとは、機械可読目録のことであり、わが国では大手専門業者が、昭和57年に提供（有償）を開始した。国会図書館にもMARC（NDL・MARC、無償）は存在するが、公共図書館では前者が好まれている。しかし、一般の書店では、その利用がむずかしく、MARCを理由に取引が厳しくなっていった。

そんな中での指定管理者制度（平成15年施行）の導入である。さらにこの制度により、大手専門業者は電算システムの開発にも関わり、MARCをベースに一気通貫的に発注・受注・装備・納品が可能となるビジネスモデルを構築し、図書館納品が容易になった。裏返せば、地元中小書店は、図書館納入に手も足も出せなくなった。

そんなこんなで昭和50年代半ば以降最近に至るまで、地元中小書店と公共図書館とは、徐々に疎遠になっていった。

全国の図書館が指定管理者制度に席巻されるかと危惧していたが、この制度が施工されて20年を経た現在でも、指定管理者による図書館運営は全市区町村で20％弱と、他の指定管理制度導入施設に比べ、極端に低い。図書館という知の拠点運営には、思いのほか馴染まないようだ。

MARCも対抗馬（有償）が出現し、低価格化してきた。しかも書店が自由に使えるMARCが出てきた。またNDL・MARCも進化し、使用する公共図書館が出てきている。

出版4団体で構成する出版再販研究会が、5月初旬、再販維持契約書のひな形を改訂し、「官公庁の入札」の除外規定を削除した。このことが浸透すれば、定価での納品が当たり前となる。

そして、書店に重くのしかかっている「装備」の経費を、図書館側が予算を計上し、当たり前の商取引となり、地元優先の図書購入となれば、書店は地域の本好きな人を増やす活動により積極的に参加し、読書推進運動は活性化するだろう。行政には目先の予算削減にとらわれず、地域の読書環境、知の育成を視野に入れた政策を望みたい。

上野の森 親子ブックフェスタ

大谷選手も登場!?

たなかひかるさん『ぶ』のサイン会【左】
呼び込み係は金の星社 齋藤社長です【右】

大友剛さんはマジックと読み聞かせを披露【左】
とよたかずひこさんのサインを待つ親子【右】

5月4日(日祝)・5日(月祝)、東京都台東区の上野恩賜公園で「上野の森親子ブックフェスタ2025」(主催＝子どもの読書推進会議／日本児童出版協会／一般財団法人 出版文化産業振興財団)が開催された。今年も好天に恵まれ、家族連れや子どもの本に関心を寄せる人など、昨年の28500人を上回る約34000人が訪れた。

謝恩価格での児童書販売「子どもブックフェスティバル」には、80社・者が出展、絵本、児童書を中心に約55000冊が会場内に展示され、2日間の売り上げは4150万円と、こちらも前年を大きく上回った。

会期中は、各出展社ブースで、おはなし会や作家のサイン会が開かれた。自身が編集した図書を制作エピソードを交えて読者に紹介するブースもあり、読者と出版社が交流する姿が見られた。

戦後80年にちなみ、原爆で被爆したピアノを収集しているピアノ調律師 矢川光則さんが広島から運んできた「被爆ピアノ」が会場に設置され、人気ピアニスト ジェイコブ・コーラーさんがライブ演奏を行った。矢川さんは5月5日に国立国会図書館国際子ども図書館で開催された講演会「戦後80年を想う 被爆ピアノ、平和の音色」の講師も務めた。

オリジナルグッズも
いろいろありました

購入者対象の抽選会の商品
は図書カードやグッズなど

「被爆ピアノ」で演奏するコーラーさん【左】
ピアノを通して平和の尊さを伝えたいという矢川さん【右】

2020年の「読書週間」ポスター ⬆
作者・なかいかおりさんのサイン会も

子どもの本がトラックから
次々に！

おはなし隊キャラバンカーで『もったい
ないばあさん』を描く真珠まりこさん

■第30回 日本絵本賞 決定

箱入りの造本もみごとな『ぼくは ふね』が大賞に

公益社団法人 全国学校図書館協議会（全国SLA）は「第30回日本絵本賞」について、4月23日㈬に出版クラブビルにおいて最終選考会を実施し、2024年に出版された絵本より選ばれた最終候補絵本30点（うち翻訳絵本13点）より4点の受賞作を決定、5月15日㈭に発表した。各賞は以下の通り。

●日本絵本賞大賞

『ぼくは ふね』
五味太郎／作（福音館書店）

●日本絵本賞

『ひとのなみだ』
内田麟太郎／文、nakaban／絵（童心社）

『ゆきのこえ』
おーなり由子／ぶん、はた こうしろう／え（講談社）

●日本絵本賞翻訳絵本賞

『ねえ、おぼえてる?』
シドニー・スミス／作、原田勝／訳（偕成社）

『ぼくは ふね』は5名の最終選考委員が最初からそろって評価し、文句なく大賞に選ばれた。しっとりしてすこしマットな手ざわりの箱入り（しかも表1表4ともに丸い窓あきあり）の造本に、まずひきつけられる。絵本作家生活50年という著者のポップなアート感あふれる絵がすばらしく、主人公の「ふね」のモノローグで物語は展開する。読者もいっしょに人生を旅しているように思えてくる。

『ひとのなみだ』は、現代の「リモートでバーチャルな」戦争の姿を描いた力作。現代でも戦争ではどれだけ多くの命が、人々の生活が失われるのか。デジタルネイティブ世代にこそ読んでほしい。

『ゆきのこえ』は、朝起きて真っ白な雪の世界を楽しむ男の子をノスタルジックに描く。地球温暖化前の北の国では、こんな雪が降ったのかも。

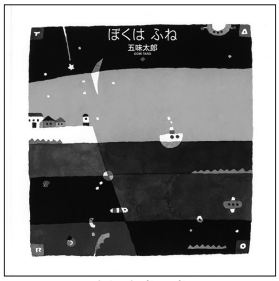
『ねえ、おぼえてる?』は、今回トップの評価との声もあった。情感たっぷりに描かれた母子の目線の動きや表情、効果的に差しこまれるコマ割りの過去シーンなどで、圧倒的に芳醇な物語世界が展開する。「行間」から伝わってくるのは現代の格差と貧困だ。ロードムービーを観ているかのような味わいも、魅力を重層的にしている。

なお、今年も、「日本絵本賞ポップ交流サイト」が6月中旬に開設され、最終候補絵本30点のオリジナルポップを募集している。応募作品はサイトに掲載され、「いいね」をつけたり、学校の授業で鑑賞するなど、絵本を通じた実践の広がりが期待されている。

また、全国SLAでは、日本絵本賞ポップ交流サイト・実践校60校を募集。実践校には、日本絵本賞受賞絵本と最終候補絵本のセットを寄贈し、絵本による読書活動を展開し、ポップを投稿してもらう。

交流サイトでは、ポップの投稿と閲覧のほか、日本絵本賞最終候補絵本リスト、実践校の募集要項と応募フォームなど詳細が確認できる。

●日本絵本賞ポップ交流サイト
https://ehon-pop.j-sla.or.jp/



日本絵本賞大賞の『ぼくは ふね』

■日本児童文芸家協会 各賞 贈呈式

人の縁に恵まれて生まれた作品が新人賞に

一般社団法人 日本児童文芸家協会は、5月21日㈬、東京都千代田区の東京消防庁スクワール麹町にて、「2025年度 児童文化功労賞・協会賞・新人賞 贈呈式」を開催した。

●今年度の受賞作・受賞者

【第49回 日本児童文芸家協会賞】
該当作なし

【第54回 児童文芸新人賞】
山下みゆき『直紀とふしぎな庭』（静山社）

【第64回 児童文化功労賞】
国松俊英（児童文学作家）
けんぶち絵本の里を創ろう会

左から、西本鶏介さん、けんぶち絵本の里を創ろう会、国松俊英さん、山下みゆきさん

西本鶏介（児童文学作家・評論家・昭和女子大学名誉教授）

新人賞の『直紀とふしぎな庭』は朝日小学生新聞での連載の書籍化。山下さんは、編集者・画家・装幀家に恵まれたと喜び、「物語の世界では、恵まれすぎると困難がやってくるので、身構えています。どんな困難があっても、児童書に関わっていきたい」と述べた。

功労賞の国松さんは、「会社の仕事以外に一生の趣味をと、童話創作サークルに参加したのが創作のきっかけ。好きなことをやってきただけ。若い人への働きかけが認められたのかなと思う」と語った。けんぶち絵本の里を創ろう会は、人口2700人の町での「絵本によるまちづくり」活動。「作家、出版社の協力を得て、人と人とのつながりを大切にしてきたことが評価された」と喜びを述べた。西本さんは、「初代理事長 浜田広介さんをはじめ、協会には迷惑ばかりかけてきた。賞をいただいたので、時効になったのだろう」と述べて、会場をわかせた。

■第64回 全出版人大会

文字・活字文化の持続のため 出版人の力の結集を呼びかける

ゴールデンウィーク明けの5月7日(水)、東京都千代田区のホテルニューオータニで「第64回 全出版人大会(主催＝日本出版クラブ)」が開催され、出版関係者約400人が出席した。

野間省伸 大会会長・日本出版クラブ会長（講談社社長・読書推進運動協議会会長）の、出版界の現状と64回を数えるこの大会の意義について語る開会の挨拶に続き、江草貞治 大会委員長（有斐閣）が登壇。挨拶に続いて大会声明を朗読した。大会声明では、日本の出版は世界でも稀なエコシステムを構成しているとし、文字・活字文化を持続可能なものとするため、出版に携わるすべての者が力をあわせなければならないと述べた。（全文は下記掲載）

開会の挨拶を述べる
野間省伸 大会会長

続いて来賓として祝辞を述べた赤松健 文部科学大臣政務官は、スピーチの冒頭でみずからも漫画作家であると披露し、祝辞に対して会場から拍手がわいていた。

来賓祝辞のあと、恒例の長寿者祝賀（24名）、永年勤続者表彰（253名）があり、代表者して、今村正樹氏（偕成社）、石根左惠氏（ベースボール・マガジン社）が謝辞を述べた。

続いて講演に移り、政治学者で東京大学社会科学研究所所長である宇野重規氏が登壇。さまざまな局面で「知」が危機に瀕しているともいえる「トランプ2.0」の時代において、読むべき本、おもしろい本をきちんと紹介できる人が必要になってくるなどと述べた。

講演終了後、懇親会が行われ、出版にかかわる多くの参加者のにぎやかな交流が続いた。

大会声明

日本には現在、約3,000社の出版社と約10,000店に及ぶ書店が存在し、その間を取次会社が結び、古書店や図書館も含めて読書環境を支える大きなエコシステムを構成しています。これほど多様な出版社が共存し、生活に根ざした書店が全国に広がっている国は、世界的にみても稀です。空間的な広がりだけでなくその歴史においても、明治時代以降、近代出版産業は一貫して歩みを止めることなく、世界の知の受容と学問の深化に貢献し、精神文化の発展に長らく寄与してきました。

我が国は今、かつてない人口動態の変化に直面しています。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、18歳人口は今後10年で約10％、15年で約25％減少する見通しです。この変化は、社会のあらゆる領域に影響を与えるものであり、出版文化も例外ではありません。若年層の減少は、知の継承と創造のサイクルを支える基盤が危うくなることを意味しています。こうした現実に対し、私たちは単に市場規模の縮小を受け入れるだけにとどまらず、次なる展開を描くべき時に来ています。

2023年、市川沙央さんの芥川賞受賞作『ハンチバック』は、出版文化に新たな問いを投げかけました。「読む」という行為が、視覚や身体の自由を当然のものとする暗黙の了解の上に成り立ってきたことに対し、私たちは深い自省を迫られました。本を手に取り、頁をめくること、それ自体が困難な状況に置かれた人々の存在を、長らく視野の外に置いてきたのです。

しかし、新たな技術によって、文字・活字文化をより広く開かれたものに変えていくことが可能です。AIをはじめとした科学技術の進展は、読書を楽しむことに関するあらゆる制約を取り払い、誰もが自由に文字・活字文化にアクセスできる未来を現実のものとしつつあります。音楽や映像が国境を越えて共有されているように、出版もまた、誰にとっても身近で自由なものになることができるはずです。学問とともに歩んできた学術出版も例外ではなく、知を公平に届ける使命をあらためて自覚し、アクセシビリティの向上に率先して取り組む責任があります。今こそ、すべての人に開かれた読書環境の整備に取り組み、国境を越えた、より広大で多様な文字・活字文化を構想するときです。

今年は戦後80年、昭和で言えば100年となります。戦時体制と敗戦、復興と高度成長の時代を経て、成熟社会としての新たな段階にある我が国において、私たちがこれまで見過ごしてきた課題がまだ多くあります。その課題の先には、文字・活字文化の大きな可能性が広がっているのではないでしょうか。私たち出版に携わるすべての者は、文字を通して学び楽しむ文化として何を次世代に伝えていくか、持続可能で開かれた文字・活字文化とはなにか、力を合わせて実行していきましょう。

この決意をもって、大会声明といたします。

2025年5月7日

第64回 全出版人大会

■「絵本専門士」について

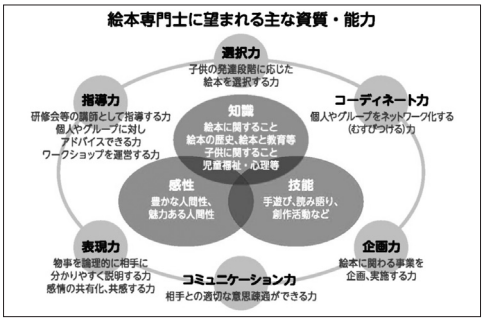
すべてのひとに絵本を届ける 絵本のエキスパート

絵本専門士委員会事務局
(国立青少年教育振興機構)
柴谷紗良

●絵本専門士とは?

絵本専門士は、絵本に関する高度な知識、技能および感性を備えた絵本の専門家です。子どもの読書活動の重要性、とりわけ絵本と親しむことや絵本の読み聞かせの大切さが指摘されるなか、絵本の魅力や可能性を伝える指導者として大いに期待され、また、注目度の高まっている存在です。

絵本専門士の役割は、読み聞かせやおはなし会、ワークショップなど、実際に絵本を使って行う取組、絵本に関する知識を持って行う指導・助言、絵本に関するみずからのネットワークを活かした人的・物的コーディネートなどはば広く、活動の場も幼稚園や学校から図書館、医療機関までさまざまです。



●養成制度の成り立ち

絵本専門士養成制度は、2012年に、有識者による絵本に係る専門家の養成に関する検討会が立ち上げられたことに始まります。子どもたちの健やかな成長を促す絵本の可能性やその活用法を、学校や家庭のみならず地域社会全般に普及させるとともに、実際に絵本の読み聞かせやワークショップをはじめ、子どもたちの読書活動の推進に携わる絵本の専門家(絵本専門士)を養成する必要があることから、創設された制度です。2014年度から「絵本専門士養成講座」が開設され、国立青少年教育振興機構において実施しています。

また、子どもの読書活動を力強く推し進めていくために、若い方々にもっと関心を持ってもらい、活動に参画し、牽引してもらうため、認定絵本士養成制度を創設し、2019年4月よりスタートしました。認定絵本士養成講座は、大学・短期大学・専門学校などで開設されています。認定後は、講座で学んだはば広い知識や技能等を活かし、地域や職場で絵本の魅力や可能性を伝え、地域の読書活動を充実させる役割が期待されます。さらに、こうした活動を通して一定の実務・実践経験を積み、資質、能力がふさわしいと絵本専門士委員会から認められることにより、絵本の専門家である「絵本専門士」として認定されます。

2024年には、絵本専門士が誕生してから10周年を迎え、現在では全国で717名(2025年6月時点)の絵本専門士が活躍しています。

全国から熱心な参加者が集う
絵本専門士養成講座

●絵本専門士養成講座

絵本専門士に望まれる主な資質や能力は、「選択力」「コーディネート力」「企画力」「コミュニケーション力」「表現力」「指導力」であると考えています。

本講座は、絵本専門士となるために必要な3つの領域(「知識を深める」「技能を高める」「感性を磨く」)を身につけるための講座です。講座は、30コマの授業(1コマあたり90〜120分)と修了課題により構成されます。

授業は、絵本や子どもに関する知識、おはなし会やワークショップを運営する技能、絵本の創作や編集に要する豊かな感性などを、バランスよく修得できるような内容となっています。

また、絵本に関わる多様な領域の専門家や実践家を講師として招き、講義、演習などのさまざまな形態で実施するとともに、1クラスあたり約35名の定員として、きめ細かい指導を行うことを特長としています。

●絵本専門士の活躍

絵本専門士の職業は、教育関係や図書館・書店関係のほか、医療関係や福祉関係など、多岐にわたります。講座で身につけた多彩な資質や能力とそれぞれの専門性を活かして、図書館や書店、幼稚園や学校、さらに高齢者福祉施設や病院など、さまざまな場で活動しています。

読み聞かせやおはなし会、絵本の展示や研修会の講師などを通して、赤ちゃんから大人、お年寄りまで、はば広い年齢層に絵本のすばらしさを伝えています。

※絵本専門士の派遣依頼や養成講座についての詳細はホームページをご覧ください。なお、2025年度の講座受講生は募集を終了しています。

●絵本専門士ホームページ
https://www.niye.go.jp/services/ehon.html

優良読書グループの歩み (6)

2024年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。（順不同）

子ども文庫 えんどうまめ

代表者　小河志のぶ
千葉県八街市

〈推薦〉
千葉県読書推進運動協議会

「子ども文庫 えんどうまめ」を1994年7月に立ちあげ、今年で30年目を迎えます。

地域の子どもたちがたくさんの本に親しむ、文化的な場の一環となり、また、安心できる居場所になってほしいとの思いで開設しました。

「えんどうまめ」は、アンデルセン童話『とびだした五つのエンドウ豆』より引用し、文庫というサヤから元気に飛び出す子どもたちをイメージしてつけた名前です。

市立図書館の協力で団体貸出300冊、個人からの寄贈書250冊でスタートしました。開設当時は、スタッフ2名でしたが、翌年に新メンバーが加わり、4名となりました。

毎週木曜日、午後3時～5時に泉台区民センターで文庫を開いています。「おはなしタイム」と「季節の工作」をそれぞれ毎月1回行っています。12月の「クリスマスタイム」では、大型絵本、大型紙芝居、人形劇、腹話術、影絵、ペープサートを楽しみます。

文庫で子どもたちは、折り紙やお絵描き、トランプ、オセロゲーム、読書、宿題など、自由に時間を過ごしています。

年6回の資源回収を実施し、新しい絵本・児童書を購入しています。そのほか、1996年にユネスコライブラリーより児童書100冊、2012年に伊藤忠記念財団より児童書100冊を寄贈いただきました。現在所蔵している児童書は、アニメ本も含め920冊程度となっています。

開設当初は、蔵書をすべて、テーブルに展示していましたが、冊数の増加により全冊の展示が困難となったので、現在は毎週ランダムに100冊を展示しています。なお、それ以外の絵本・児童書は、子どもたちが自由に出し入れできるようにしています。絵本の貸出は、現在やっていません。

コロナ禍の3年間は、活動を休止しました。2023年5月より、再開してます。スタッフは現在2名です。

集う子どもたちは開設当時より増えており、これはほんとうにうれしく、励みになっています。これからも文庫活動を通して、子どもたちを見守っていきたいと思います。

2000年、子ども文庫から人形劇グループ「えんどうまめ劇団」が誕生し、現在も人形劇活動を継続しています。保育園・幼稚園・子育て支援など、今年は15回公演予定です。

クリスマスには大型紙芝居
なども上演

岩出図書館ボランティア 布絵本グループ

代表者　中村　文子
和歌山県岩出市

〈推薦〉
和歌山県公共図書館協会

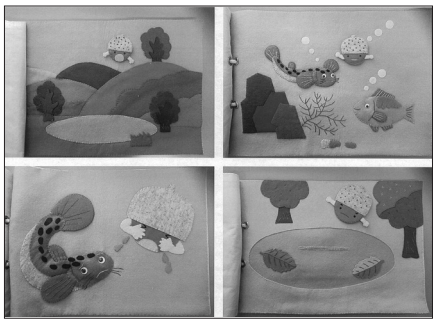
2006年4月の岩出図書館開館当初より現在にいたるまで、布絵本や布のおもちゃを制作しています。図書館で子どもたちや障がいのある方に布のあたたかみのある本をさわってもらいたい、楽しんでもらいたいとの思いで、メンバーで分担して一針一針心をこめて活動を続けています。

活動は、メンバー各自がパーツを自宅で作り、図書館に持ち寄り、布絵本を制作しています。子どもたちが笑顔になってくれたら、喜んでくれたらうれしい。絵本を読むことのきっかけや絵本を読む楽しみを知るきっかけになればと思っています。ひとりでも多くの子どもたちに利用してもらうのが願いです。

布絵本の制作を主な活動としていますが、そのほかにも布のおもちゃも制作しています。作品が決まればメンバー各自、自宅で作成し、岩出図書館に持ち寄り仕上げています。岩出図書館に来館しての年間活動回数は多くはありませんが、毎年、新作を作成しています。

これまでの布絵本のメンテナンスも随時行っています。布絵本が傷んできたり、パーツがなくなったりということもありますが、それだけ利用されているのだろうと、補修にも力が入ります。

また、布絵本によって、事故につながらないよう細心の注意をはらい、ていねいに仕上げるよう心がけています。細かい手作業です

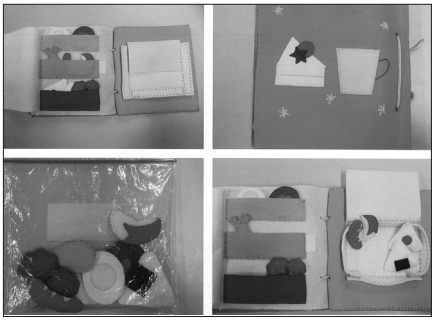

童謡『どんぐりころころ』の布絵本

が、絵本づくりにメンバーそれぞれががんばっています。

制作中は顔の見えない利用者に向け布絵本を作っていますが、完成後に子どもたちが布絵本を手にしたり、布のおもちゃで遊んだりして楽しんでいる様子を見ると、布絵本制作の成果が実感でき、喜びにつながります。

子どもたちやお母さんたちが布絵本を手に取り、目を細めて楽しそうに読んでいるのを見ると、次はなにを作ろうかという気持ちになります。

これからも、子どもたちや楽しんで見てくださる方に元気をいただきながら、ひとつひとつ心を込めて布絵本を届けていきたい。



お弁当がテーマの布絵本。おにぎりなど、おかずもいっぱい！

布絵本が完成したときの喜びはかけがえのないもの。それが原動力となっています。

読み聞かせボランティア くれよん

代表者　松井里恵子
宮崎県東臼杵郡門川町

〈推薦〉
宮崎県読書推進運動協議会

私たち「くれよん」は、2006年の町立図書館開館時に、小学校の保護者有志9人で図書館ボランティアとして活動を開始しました。

これまで図書館の定例おはなし会やイベント時に、子どもが興味を持って絵本に親しめるように、ハンドベルの演奏やパネルシアターなど図書館スタッフと協力・工夫して活動してきました。

読み聞かせ講習会にも参加し、そこで得た読み聞かせの基礎や技術・選書の方法などについて、毎月の定例会で自主研修したり、手遊び用の小物を手作りしたり楽しい時間を過ごし、学びあいました。

メンバー数は15人になりました。

さらに、町内小・中学校の読み聞かせボランティアへの協力や、門川町の民話の大型紙芝居を披露することもありました。

2020年には、15年間に渡る活動が認められ、宮崎県公共図書館連絡協議会から表彰され、メンバー一同とても誇らしい気持ちになりました。

その翌年、図書館を離れ、読み聞かせボランティア「くれよん」として新たに活動を始めることになりました。このときのメンバー数は13人。資金不足で、コロナ禍もあり活動自体が、むずかしくなっていました。図書館おはなし室ほかの利用ができなくなったため、無料のホールをおはなし会の会場として細々と活動を継続していきました。

2023年、町の「笑顔あふれるまちづくり推進」補助金の対象団体に認定され、予算的に余裕ができてきました。公民館でおはなし会を開催し、町内の人に「くれよん」の活動を理解してもらえるようになり、また、ハンドベルの専門家を招いて奏法の研修会も行うこともできました。これまでの主に学校を中心とした活動に加えて、一般の団体からイベントでの「おはなし会の開催依頼」も増えてきました。

今年も補助金が継続され、町内のイベントに一緒に出演した落語家やバルーンアートの作家などとの「コラボおはなし会」も実施し、また、隣の日向市のボランティアとも交流するようになりました。

おはなし会は、digital nativeの子どもには「LIVE」、中高年になった私たちには「生きがい・脳トレ」です。新メンバーを随時募集しながら、今後とも図書館施設利用ができるように、そして、私たちの活動が「読書県宮崎」の端緒になるように、おはなし会開催を続けていきます。

図書館から始まった活動は町内各施設へと広がっています

●『全国読書グループ総覧』

訂正のご希望は7月中に

公益社団法人 読書推進運動協議会は、『2023年度 全国読書グループ総覧』を刊行、道府県読書推進運動協議会および都道府県立図書館を通じて、全国の公共図書館・類縁機関へお送りしました。配布にご協力いただいたみなさまへ、心よりお礼申しあげます。また、『全国読書グループ総覧』は、都道府県・政令指定都市教育委員会、当会会員社、関係者、図書館学・司書課程講座を有する大学などへも送付いたしました。

現在、数件の図書館・類縁機関より、読書グループの活動場所などの訂正ご希望をいただいております。当方の不注意をお詫び申しあげます。

訂正箇所をまとめたものを、8月中旬に当協議会ホームページに掲載いたします。訂正が必要な箇所がございましたら、7月末までに、事務局までお知らせください。

●メール　info@dokusyo.or.jp
●fax　03-5244-5270
○件名は「読書グループ総覧訂正依頼」としてください。

■学校図書館賞 発表

歴史的な実践、これからの可能性を紹介した論文に評価

公益社団法人 全国学校図書館協議会（全国SLA）は、5月1日、第55回 学校図書館賞を発表した。

この賞は、学校図書館の振興に著しい業績を示した個人および団体を顕彰するもので、毎年公募している。

本年の受賞者は、以下のとおり。

●第55回 学校図書館賞

・論文の部

根本 彰

〈事由〉『図書館教育論 学校図書館の苦闘と可能性の歴史』の著作

●第55回 学校図書館賞奨励賞

・実践の部

高田 諒

〈事由〉「構成力」をカギとした図書館教育

（運動の部は応募者なし）

学校図書館賞を受賞した根本さんの著作は、戦後の改革期に着手された「図書館教育」という課題に焦点を絞ったもの。学校における歴史的な実践事例を詳細に検討し、報告している点と、現代における可能性も示した点が評価された。

奨励賞の高田さんは、教職員全員が同じ意識で図書館教育の重要性を認識できるよう、京都市全体を巻き込んだ改革に取り組んだ約3年間の実績が評価された。

表彰式は8月に東京都内で開催される予定。また、全国SLAの機関紙『学校図書館』6月号に、詳しい選考報告が掲載されている。

■学校図書館を考える全国連絡会 集会

対面、オンラインで学校図書館の現在を学び、情報を交流

学校図書館の整備推進と充実を願う、さまざまな立場の人たちからなる「学校図書館を考える全国連絡会」が、7月26日㈯に、第28回集会「ひらこう！ 学校図書館」を、会場とオンラインで開催する。

記念講演は、「学校図書館のさらなる成長のために～ともに考えたいこと・取り組みたいこと～」。講師は野口武悟さん（専修大学文学部教授）。

記念講演後の意見交流会では、野口さんも交えて、学校司書、市民などのさまざまな参加者からの質問、意見、提案を受け付ける（会場、オンラインどちらも対象）。課題の発見とその解決を探り、また、実践の共有の場となることが期待される。

会場は日本図書館協会 研修室（東京都中央区）、オンラインはZoomを使用する。参加には事前申し込み（先着順）と、参加費が必要。参加申し込み締め切りは7月22日㈫までとなっている。

申し込み方法および、当日のタイムテーブル、会場案内図など、詳細は学校図書館を考える全国連絡会ホームページを参照のこと。また、参加申し込みはPeatixサイトからできる。

●学校図書館を考える全国連絡会

https://www.open-school-library.jp/

参加申し込み
（Peatixサイト）
QRコード

事務局報告（5月）

☆4月23日～5月12日＝**「第66回 こどもの読書週間」**

・4日・5日＝「上野の森 親子ブックフェスタ2025」

☆7日＝機関紙『読書推進運動』690号入稿

・7日＝第64回 全出版人大会 出席（ホテルニューオータニ）

☆8日＝機関紙『読書推進運動』690号責了

☆8日＝全国公共図書館協議会へ『2023年度 全国読書グループ総覧』をお届け

・13日＝日本出版クラブ震災対策室 第4回 運営委員会 出席

☆15日＝「第55回 野間読書推進賞」候補者推薦依頼 送付

・20日＝2024年度子どもの読書推進会議、会計監査

☆21日＝**2025年度 第1回 理事会**

・21日＝日本児童文芸家協会 2025年度 各賞贈呈式 出席（スクワール麹町）

・22日＝2025年度 講談社絵本賞 出席（赤坂プリンスクラシックハウス）

☆23日＝2025年度 第2回 理事会案内郵送

☆22日＝2025年度 定時総会案内を会員社へ送付

☆26日＝「2025 敬老の日読書のすすめ」書目推薦締め切り

・30日＝日本児童文学者協会 2025年度 文学賞贈呈式 出席（出版クラブ）

読書推進運動
協議会X
（旧Twitter）

●編集部&事務局のひ・と・こ・と

●先月の続きです。友人を看取り、葬儀の支度をしてくれたAさんは、友人からスマホの連絡帳を見る許可を得て、私に連絡をくれました。おたがい、まったくの初対面です。

●友人の枕元に置かれた文庫本を見て、「クリスティ、好きだったんだ？本の話はしてきたれど、クリスティの話はしなかったな」とつぶやいたのがきっかけで、Aさんと友人の好きだった本の話ができ、友人の思いがつまった本を形見としていただくことができました。

●Aさんが棺に本を納めたのは、友人が蔵書の整理に悩んでいたこと、最後に残した本への思いを知っていたからです。友人の蔵書が電子書籍中心だったら、タブレットやスマホ内の個人情報としてAさんがその内容を知ることもなく、本を通じて私と友人の思い出を語りあうことはなかったでしょう。

●シリーズでもらった形見の4冊の奥付を見ると、第1作の発行日がいちばん遅いことに気づきました。友人は順番に読んでいたはず、気に入った本は絶対に買う主義です。うっかり紛失したのか、誰かに貸したまま返ってこなかったかで買い直したんだろうかと、愛着の深さをいっそう感じました。

●電子書籍には持ち運びの便利さ、読書バリアフリーの可能性などの長所がありますが、その本への「最後まで手放せない」という強い愛着は生まれるのか、所有者の人生や思い出までも伝えられるのか。そんなことをこのひと月、考えています。（伸）